

.

1月上旬、スウェーデンの北極圏で撮影された一枚です。現地に立つことなく、東京からの遠隔操作によって観測しました。澄み切った夜空に明るく輝く月の左側、同じ高さの位置に、わずかに色づいた淡い光の塊が浮かんでいるのが分かります。これは月の周囲に現れる大気光学現象の一つで、「月の幻日（つきのげんじつ）」あるいは「側月（そくげつ）」と呼ばれるものです。太陽の左右に現れる場合は「幻日（げんじつ）」と呼ばれますが、月の場合に対応する正式な和語として「幻月（げんげつ）」という名称は定着していません。

この現象は、上空高いところに広がる巻層雲や巻積雲の中に含まれる、六角柱状の氷晶によって生じます。氷晶がほぼ水平にそろって浮かぶと、月光が特定の角度で屈折し、月から左右およそ 22 度、同じ高度の位置に光が集まります。これは月にかかる 22 度のハロ（月暈＝げつうん）の円周上にあたります。その結果、月の「分身」のような淡い光斑が現れます。本来は左右対称に見える現象ですが、この写真では右側の側月は画角の外にあり、左側だけが写真に写りました。

月の高度が低いときに限って見られるのは、氷晶による屈折光が観測者の目の高さで合致するためです。月が高く昇りすぎると、屈折光は地平線の下や視野外に逃げてしまい、地上（観測者）には届きません。また、月光は太陽光よりはるかに弱いため、空が暗く、雲の厚みや氷晶の向きが絶妙にそろわなければ成立しない、非常に条件の厳しい現象でもあります。

鮮やかな動きを見せるオーロラに比べると地味に感じられるかもしれませんが、出現条件の希少さという点では、ある意味オーロラ以上に珍しく、静かで幻想的な光景と言えるでしょう。月と大気が一瞬だけ協力して生み出した、極夜の北極圏ならではの「幻の月」です。

（2026 年 1 月上旬／スウェーデン・ヨックモック郡・ポルユス駅／東京から遠隔観測）

